

及びハバロフスク国立ペスト予防研究所を訪問視察し、その後当該研究機関とともに合同で、渡り鳥の代表的な営巣地であるハンカ湖周辺、及びアムール川支流源流域にて、渡り鳥からの検体採取の試行調査を行った。その結果、現地研究機関のうちハバロフスク国立ペスト予防研究所においては、研究資金の調達に困難はあるものの、十分なウイルス検査・保管に関わる知見・技術と設備を持ち、また渡り鳥と媒介節足動物調査能力を有し、脳炎ウイルスの他、鳥インフルエンザウイルスの調査研究を、ロシア連邦の中央研究機関と連携して実施していることが確認された。同研究所は、自然界におけるウイルスの生態解明の調査研究においては、むしろ我が国の機関を上回る実績と能力を有していることがうかがわれ、今後、我が国研究機関のカウンターパートに十分なりうるもの考えられた。なお文部科学省研究班の北海道大学チームにおいては、すでに相当のシベリア調査実績を有しており、現地機関との連携及び共同研究について、十分な知見と実施能力を持っていることから、今後のウエストナイル熱に関わる厚生科学研究班の参考となると思料された。

C 研究結果

一般的に、研究評価を行う際には、評価の時期、評価の目的、評価項目（対象）、評価を行う者の選定、評価方法について検討し、それぞれの研究特性に適合した組み合わせを用いることにより行われる。平成 17 年度新興・再興感染症研究事業においては、昨年度に続き、事前評価委員会及び中間・事後に関しては、主任研究者からこの間における研究成果の発表いただき、併せて評価委員会を実施した。また、その実施にあたっては、他の研究事業との比較・検討及び過去の問題点等を踏まえ、改善を試みた。

D 結論

新興・再興感染症研究事業の評価において、研究事業の評価方法に関する資料の収集・分析及び評価委員会の運営を通して、より適切な評価を行うための手法についての有益な所見が得られた。